

皮心伝心

皮膚外科(skin surgery)へのいざない

本邦における皮膚外科の歴史は比較的浅く、マイナーな一領域として扱われることが多かったが、最近になり重要性が認知されつつあるように思う。日本皮膚外科学会も今年で第31回(9月10～11日、沼津市)を数えるまでになり、参加者も年々増え続けている。一方では、手術をしない(できない)皮膚科医の増加を危惧する声もしばしば耳にする。皆さんが皮膚外科に対して抱くイメージはどのようなものであろうか。「皮膚外科は形成外科とほとんど一緒」と思っている方も多いかもしれない。個人的には、「皮膚に生じた病変、異常を、外科的アプローチにより解決へ導く役割」にあると思う。したがって、皮膚の良性・悪性腫瘍というまでもなく、母斑、血管腫、さらには熱傷や外傷性皮膚障害も含めた疾患群を、必然的に扱うことになる。この際、忘れてならないことは、手術自体が目的化することを避ける心掛けであろう。手術手技だけを切り売りするのではなく、診断と鑑別診断、術前計画、手術、術後管理、経過観察といった一連の診療に対して、主体的に関与していくことも不可欠である。種々の皮膚疾患や多彩な皮疹と、日常的に接していることが鑑別診断力には極めて重要であり、この点が皮膚外科とオーバーラップする診療科との、最も大きな違いではなかろうか。また、手術結果の短期的予後と長期的予後がかなり異なる症例も多い。大学からの2～3年の派遣赴任期間での長期経過観察は不可能であり、残念なこととしかいいようがない。

話は変わるが、プロ棋士とAI(人工頭脳)との対局が最近注目されている。ディープラーニング(深層学習)と称される重層化回路によってAIが進化した結果、残念ながら人間の方が分が悪いようである。医療現場でもかつては重い教科書や辞書が普通であったが、今どきの若い医師たちは、電子医学事典やスマートフォンを片手に、その場で調べてしまう。考えてみれば、筆者のような凡庸な医者よりも、AIの方がずっと優れていることは、容易に想像できる。症状や病歴を入力しさえすれば必要な検査が表示され、さらに検査結果をインプットすれば、診断名に加えて推奨される治療法や予後・注意事項まで、AIが立ちどころに提示してくれる状況が、近い将来訪れるであろう。人間の仕事がAIに奪われてしまう時代の到来が懸念されているように、医師の仕事の大半は、間もなくAIに取って代わられてしまうのかもしれない。とはいえ、診断や薬物治療はともかくとして、皮膚外科手術をAIがこなすまでには、まだまだ時を要するのではないかとも思われる。

学会などで報告を聴いていると、“変わった手術や大掛かりな手術をしなければならない”という錯覚に捕らわれてしまうが、皮膚外科の基本は単純切除・縫縮であり、これのみで大半は解決可能である。この基本手技が確実にできるようになれば、植皮や皮弁も自然と身についてくると思う(数年間の修練を要することはいうまでもないが)。プロフェッショナルオートノミーの機能不全のためか、新専門医制度の先行きは今のところ不透明であるが、「なんらかの縛りを医師の就業場所や専門性にかけてくることは間違いない」(柵木愛知県医師会長)ので、専門性を示しAIに負けないためにも、将来の皮膚科医には皮膚外科修得をぜひ勧めておきたい。

皮膚外科手術を、あっさりと他科に丸投げしては、将来に禍根を残しかねない。

臼田 俊和

(前名古屋大学臨床教授)